

九州北部地域の角筆文献

—福岡県立図書館蔵諸岡文書を中心として—

柚木 靖史・近藤 友子

はじめに

本稿は、主に二〇一九年から二〇二〇年にかけて、九州地方北部域で行った角筆文献調査の調査結果をもとに、特に福岡県立図書館の諸岡文書の角筆文献を取り上げ、新たに見出された角筆文献を紹介するとともに、九州地方北部域の角筆文字情報の特徴について考察することを目的とする。特に福岡県立図書館の諸岡文書の調査については、二〇一五年に第一回の調査を行っており、二〇一九年の調査は第二回の調査となる。

角筆文献に書き入れられた角筆文字が、墨で書かれた文字に比べて口頭語を反映しやすいことは、小林芳規博士が著された数々の論考によって知られる。⁽¹⁾九州地方北部域の角筆文献を資料とすることで、九州地方北部域の近世語の方言事象の特徴について考えてみたい。角筆文献を資料とすることで、近世方言

の地域的な特徴や、近世方言から現代方言へと通ずる方言の歴史的变化を考えることができると考えており、本稿ではその可能性の糸口を示すとともに、角筆文献、角筆文字研究の課題についても考えてみたい。

今回、共同執筆される近藤氏は、図書館情報学の視点から、角筆文献調査にも加わっていた。また、月に一回行われる角筆例会を通して、角筆研究について様々な観点から論じてきた。本稿では、その内容を踏まえて、角筆研究について新たな視点から、論じていただいている。なお、本稿では、角筆が書き込まれている資料を角筆文献とし、実際に書き込まれている文字を角筆文字とし、角筆文字からわかる情報を角筆文字情報という用語で示している。

『福岡県文化会館所蔵 福岡県近世文書目録』⁽²⁾によれば、福岡県立図書館には、明石文書、黒田家文書等が存することが分かるが、いずれも和漢書類が少ないことから、まずは、蔵書数が

多く、また和漢書が比較的多く存する諸岡文書を調べることにした。

諸岡文書は、『福岡県文化会館所蔵 福岡県近世文書目録』によれば、「昭和43年に諸岡秀輔氏から寄贈を受けたもので、明治初年まで怡土郡鹿家村の大庄屋であつた諸岡家に伝来する地方文書その他の蔵書である」とされる。また、『福岡県近世文書目録』の凡例によれば、「1、この目録は、福岡県文化会館所蔵資料のうち諸岡文書と改めたものである、2、この文書は、昭和40年10月諸岡秀輔氏より寄贈を受けたものである。3、諸岡家は、明治のはじめまで怡土郡鹿家村の大庄屋である。4、この文書は、庄屋関係の文書記録約100点程の写本約60点、詩歌草稿約50点、和漢書105点(約560冊)からなっており、地方資料として貴重なものであるが、庄屋関係記録が散佚して少ないのが惜しまれる。(以下の文章は、私に後略する)」とある。

「明治初年まで怡土郡鹿家村の大庄屋であつた諸岡家に伝来する地方文書その他の蔵書である」とされることから、今回発見された角筆資料は、現在の福岡県の最西部(福岡市西区・早良区の一部、糸島市)地域の近世の言語事象を表していると考えられる。

福岡県立図書館の角筆調査は、以下の日程で行った。

《第一次調査》

○調査日

二〇一五年八月二十五日(火)

二〇一五年八月二十六日(水)

二〇一五年八月二十七日(木)

○調査者 柚木靖史

○調査場所 福岡県立図書館内

○調査対象 諸岡秀輔寄贈文書

○調査内容 角筆の書入れを発見し、それを解読する。

八月二十五日 五点の角筆文献発見

・近思録 一冊 ・古文孝経 一冊 ・易经 二冊 ・易经 二冊 ・尚書 五冊

八月二十六日 四点の角筆文献発見

・小学 三冊 ・孟子集註 四冊 ・孟子 四冊 ・論語 四冊

八月二十七日 四点の角筆文献発見

・古文真宝 二冊 ・七才詩集注解 二冊 ・三体詩法 三冊

冊 ・杜律集解 二冊

《第二次調査》

○調査日 二〇一九年二月十八日

○調査場所 福岡県立図書館内

○調査者 柚木靖史 近藤友子

○調査内容 第一次調査で見出した角筆文献を対象に角筆文字

を撮影する。

研究協力者の近藤友子氏と、福岡県立図書館を訪れ、角筆文字の写真撮影を行った。なお、この度の調査で撮影した写真については、今後の研究調査と画像公開に向けて、共同研究者の石田泰子氏（広島市立図書館職員）が整理と保存を行なった。

一 福岡県立図書館の角筆文献

一―一 福岡県立図書館諸岡文書の角筆文献

(1) 近思録 一冊

江戸時代中期板 袋綴装 朱書・角筆 諸岡文書202 「諸

岡秀輔氏寄贈」印あり

〔昭和40・10・21 福岡県文化会館蔵書〕印あり

(2) 古文孝経 清家正本 再刻 一冊

江戸時代弘化二年（一八四五）板 袋綴装 諸岡文書203

〔刊記〕弘化二年春三月

従五位上行大舍人助撰音博士源朝臣松苗拝撰

御免許 嘉永二年己酉三月 弘化二年乙巳三月再刻

門下末弟 御本 御弘通 支配所 伏原家蔵 「明経道

儒」(朱印)

(3) 文化新刻 易経 字引付 乾坤 二冊

明治十四年（一八八二）板 諸岡文書207-1-2 袋綴装

墨書・角筆

(表紙・墨書) 望遠亭蔵本

(巻末・墨書) 明治十四年正月七日習之

明治十四年正月十三日終之

〔刊記〕明治十四年正月四日 明治十四年正月六日

(4) 易経 乾坤 二冊

江戸時代元禄十二年（一六九九）板 諸岡文書208-1-2

袋綴装 墨書・角筆

(表紙裏・印刷) 貝原先生鑒定 竹田定直刪正

〔新点五経白文〕

元禄己卯春正月穀日 梓行

(5) 尚書 正本 五冊

江戸時代中期板 諸岡文書213-1-5 袋綴装 墨書・朱

書・角筆 「諸岡秀輔氏寄贈」〔昭和40・10・21 福岡県

文化会館蔵書 NO・105886〕印あり

(6) 小学 内篇 外篇 三冊

江戸時代元禄七年（二六九四）板 諸岡文書218-1-3 袋

綴装 墨書・角筆

(表紙・墨書) 諸岡蔵本

(刊記) 元禄七載甲戌重陽穀日

書林 皇都 川勝五郎右衛門 武江 須原屋茂兵衛

(7) 孟子集註 四冊

江戸時代元禄十三年(一七〇〇)板 諸岡文書230114

袋綴装 墨書・朱書・角筆 「諸岡秀輔氏寄贈」 「昭和40・1

0・21 福岡県文化会館蔵書」印あり

(第二冊・表紙見返・墨書) 鶯棲舎

(第二冊・後表紙見返・墨書) 福岡市福岡西町

(刊記) 元禄十三庚辰歳九月朔日

京師馬場二条下ル町／吉野屋権兵衛／大坂高麗橋西壱

町目／同 五兵衛

御書物所 京都三条通堺町 出雲寺松栢堂

(8) 孟子集註 四冊

江戸時代元禄十三年(一七〇〇)板 諸岡文書231114

袋綴装 墨書・朱書・角筆 「昭和40・10・21 福岡県文

化会館蔵書 NO・105977」 「諸岡秀輔氏寄贈」印あり

(第一冊 表紙・墨書) 東郷姓

(第一冊 表紙見返し・墨書) 東郷轍 梓

(第二冊・後表紙見返し・墨書) 東郷岩吉

(第四冊 後表紙・墨書) 明治十三年 仲夏

(第四冊 後表紙見返し・墨書) 享保五歳 正月

(刊記) 元禄十三庚辰歳九月朔日

京都馬場二条下ル町／吉野屋権兵衛／大坂高麗橋西壱
町目／同 五兵衛

(9) 論語集註 四冊 合二冊

江戸時代中期板 諸岡文書236 袋綴装・墨書・角筆 「昭和

40・10・2 福岡県文化会館蔵書」 「諸岡秀輔氏寄贈」印あ

り

(版心記) 倭板四書 統論語孟子註 山崎嘉点

(第一冊目・表紙見返し・墨書) 南良崎八郎 十四歳 読之

(第一冊・卷末・墨書) 檜崎八郎 檜崎民次郎 十二歳二而達読

之

五等郵便局 吉井役場

(第一冊・後表紙見返し・墨書) 檜崎専六拜

(第二冊・後表紙見返し・墨書) 檜崎羽千郎 吉井役場 八郎

檜崎多美次郎 十二歳に而

達読之

(10) 新校訂改訓点 古文真宝後集 全十卷 乾坤 二冊
江戸時代元禄十年(一六九七)板 諸岡文書281 袋綴装
墨書・角筆

(刊記) 元禄丁丑仲夏穀旦

堀河通／八尾平兵衛 重刊

(11) 皇明 七子詩集註解 二冊

江戸時代延享四年(一七四七)板 諸岡文書300 袋綴装

墨書・白書・角筆

(第一冊) 後表紙見返し・墨書 望遠亭藏書

(刊記) 延享四歳丁卯春三月日再刻

皇都書林 山岡四郎兵衛／井上忠兵衛／梅村三郎兵衛

寿梓

(12) 増注 唐賢絶句 三体詩法 三冊

江戸時代享保十年(一七二五)板 諸岡文書301 袋綴装

墨書・角筆

(刊記) 享保十龍集乙巳

皇都 書肆 文華堂

(13) 杜律集解 五言 卷三卷四 合冊一冊 七言上下 合

一冊

江戸時代中期板 諸岡文書303 袋綴装 墨書・角筆

(五言・表紙見返し・墨書) 南勢高向仁頭太夫代 藤田長太夫君

賜焉

(五言・後表紙見返し・墨書) 岡子祥的

(五言・内題) 杜律五言集解 卷之三

(刊記) 元禄九年龍集丙子季秋穀旦

神洛書肆美濃屋彦兵衛繡梓

一―二 諸岡文書の角筆文献の特徴

諸岡文書から見つかった角筆文献の成立時期は、早くは江戸時代元禄期から、遅くは明治時代までであり、時期は一定しない。十三点中五点が元禄期の板であり、五点が江戸時代中期と判断できる文献なので、全体的に近世中期ごろの板から角筆が見つかったといえる。

墨書としては、文献6に「諸岡蔵本」と見える他、諸岡家とのかかわりを示す情報は見いだせない。地域名としては、文献9に「吉井役場」(現うきは市)が見える。人物名としては、文献8に「東郷岩吉」、文献9に「南良(檜) 埼八郎」「檜崎民次郎(多美次郎)」、文献12に「南勢高向仁頭大夫」「藤田長太夫」等があるが、いずれも未詳である。

角筆がいつだれによってどこで書き入れられたかということ
は確定できない。代々諸岡家に伝わった文書なので、諸岡家と
関わる人物によって書き入れられたと考える。文書に書き入れ
られた墨書が近世後期とみられることから、角筆もおおよそ同
じころに書き入れられたと考えられる。

一―三 各文献の角筆文字情報

- (1) 近思録 一冊
 ・元禎「テイ」(序 二丁裏7行目)
 ・遺スハ「ノコ(スハ)」(序 三丁表7行目)
- (2) 古文孝経 一冊
 ・祀シテ「シ(シテ)」(十二丁表3行目上欄外)
- (3) 易経 二冊
 ・「止 四冊」(八丁表6行目)
 ※他に角筆による中止符あり
- (4) 易経 二冊
 ・「エヒ」(対応箇所不明)(上 二九丁表5行目)
 ※他に角筆による注示符あり

(5) 尚書 五冊

・弗答セ(朱書) 弗答「セ」(巻六 六丁表7行目)

(6) 小学 外篇 内編 三冊

- ・(外篇 巻五 十一丁表4行目)「カウ」康節・(外篇 巻五 十九丁表3行目)「セウトン」蒸肫・(外篇 巻五 十九丁表3行目)「ホウシ」「ホウ」逢迎・(外篇 巻五 三十七丁裏5行目)「ヒヨウ」評論・(外篇 巻五 三十七丁裏4行目)「ギヨ」五シ・(外篇 巻五 四二丁裏4行目)「ジュ」肅敬・(外篇 巻六 六丁裏3行目)「クハンタン」患難・(外篇 巻六 十六丁裏7行目)「ジウソク」充足シテ・(外篇 巻六 二十丁裏4行目)「ジヨク」賊・(外篇 巻六 二二丁裏4行目)「トウ」竇氏・(外篇 巻六 二二丁表6行目)「トウマサニ」盗方ニ・(外篇 巻六 二二丁表6行目)「ケイガイ」驚駭・(外篇 巻六 二二丁表6行目)「エンキヨ」援_レ抛・(外篇 巻六 二二丁裏4行目)「ジ」其ノ児・(外篇 巻六 二四丁裏5行目)「ジジャク」自若・(外篇 巻六 二四丁裏5行目)「ヨウ」相呼フトキ・(外篇 巻六 二五丁裏2行目)「ジヨク」旧族・(外篇 巻六 二六丁裏4行目)「ジヨ」「ジヨク」必軾ス・(外篇 巻六 二六丁裏7行目)「ジクタン」肉_レ袒・(外篇 巻六 二六丁表6行目)「セウ」諫讓・(外篇 巻六 二六丁裏2行目)「クハンデウ」浣滌・(外篇 巻六

- 三十丁表8行目)「クハイ」乖争ヲ・(外篇 卷六 三十丁裏5行目)「ジヨク」属県・(外篇 卷六 三十丁裏8行目)「クハイ」再ヒ会シテ・(外篇 卷六 三三丁表8行目)「シサウ」資装・(外篇 卷六 三三丁裏9行目)「キンシウ」錦・(外篇 卷六 三三丁裏5行目)「カン」翰林・(外篇 卷六 三七丁裏9行目)「クハ」華盛ニス・(外篇 卷六 三七丁裏6行目)「ソウ」僧道・(外篇 卷六 三八丁表6行目)「ガイ」王相国涯・(外篇 卷六 三八丁裏4行目)「ヘウ」ラウ」憑外郎・(外篇 卷六 三八丁裏8行目)「キウ」浹旬・(外篇 卷六 三九丁裏6行目)「ハウ」温飽・(外篇 卷六 四三丁裏7行目)「ジウジ」乳児・(外篇 卷六 四三丁裏4行目)「ジヨク」俗ニ随テ・(外篇 卷六 四三丁裏4行目)「クハビ」華靡
- (7) 孟子集註 四冊
 ・可キ殺ス 「コ(ロス)」(卷一 三八丁裏4行目)
- (8) 孟子集註 四冊
 ・(第一冊・序・五丁表3行目)「コ」渾厚
 ・(第一冊・卷一・二三丁表2行目)「ヨハ」弱キハ
- (9) 論語 四冊
 ・(卷十 二二表4行目)「チン」朕方躬
 ・(卷九 十七裏7行目)「ケツデキ」桀溺
 ・(卷九 二二裏4行目)「リヨウ」三飯繚
- (10) 古文真宝後集 十冊
 ・(第一冊 卷上 十四裏3行目)「ヨ」リ馮
 ・(第一冊 卷上 三七裏1行目上欄外)「シ」(対応箇所不明)
- (11) 七子詩集註解 二冊
 ・朱線の上に角筆にて、本文上に鍵括弧を記す
- (12) 増注 唐賢絶句 三体詩法 三冊
 ・角筆による注示符あり
- (13) 杜律集解 二冊
 ・(七言・卷下・十二丁表4行目)「シ」滋
 ・(七言・卷下・四一丁表3行目)滾滾 「エン」
 ・(七言・跋・五二丁表7行目)懐惋 「セイ」

一―四 角筆文字情報が示す音韻的事象

ア 開合について

〔開音を開音に〕

- ・(小学 外篇 卷五 十一丁表4行目) 「カウ」 康節
- ・(小学 外篇 卷六 三三丁表8行目) 「シサウ」 資装
- ・(小学 外篇 卷六 三八丁裏4行目) 「ラウ」 憑外郎
- ・(小学 外篇 卷六 三九丁裏6行目) 「ハウ」 温飽

〔合音を合音に〕

- ・(小学 外篇 卷五 十九丁表3行目) 「セウトン」 蒸肫
- ・(小学 外篇 卷五 十九丁表3行目) 「ホウシ」 「ホウ」 逢迎

- ・(小学 外篇 卷六 二二丁裏4行目) 「トウ」 寶一氏
- ・(小学 外篇 卷六 二六丁表6行目) 「セウ」 諂讓
- ・(小学 外篇 卷六 三七丁裏6行目) 「ソウ」 僧道
- ・(小学 外篇 卷六 三八丁裏4行目) 「ヘウ」 憑外郎
- ・(8 孟子 第一冊・序・五丁表3行目) 「コ」 渾厚

〔厚〕右傍

- ・(論語 卷九 二一裏4行目) 「リヨウ」 三飯繚

イ ガ行ヰ行の才段の直音を才段拗音にする

- ・(小学 外篇 卷五 三七丁裏4行目) 「ギヨ」 五シ

- ・(小学 外篇 卷六 二十丁裏4行目) 「ジヨク」 賊

- ・(小学 外篇 卷六 二五丁裏2行目) 「ジヨク」 旧族

- ・(小学 外篇 卷六 三十丁裏5行目) 「ジヨク」 属県

- ・(小学 外篇 卷六 四三丁裏4行目) 「ジヨク」 俗二随

ウ 合拗音

〔合拗音を合拗音に〕

- ・(小学 外篇 卷六 六丁裏3行目) 「クハントク」 患難
- ・(小学 外篇 卷六 二六丁裏2行目) 「クハントク」 浣

濼

- ・(小学 外篇 卷六 三十丁表8行目) 「クハイ」 乖争ヲ

- ・(小学 外篇 卷六 三十丁裏8行目) 「クハイ」 再比会

シテ

- ・(小学 外篇 卷六 三七丁裏9行目) 「クハ」 華盛ニス

- ・(小学 外篇 卷六 四三丁裏4行目) 「クハビ」 華靡

〔直音を直音に〕

- ・(小学 外篇 卷六 二二丁表6行目) 「ケイガイ」 驚駭

- ・(小学 外篇 卷六 三三丁裏5行目) 「カン」 翰林

- ・(小学 外篇 卷六 三八丁表6行目) 「ガイ」 王相国

涯

エ 四つ仮名

「ジをジに」

・(小学 外篇 卷六 十六丁裏7行目) 「ジウソク」 充足
シテ

・(小学 外篇 卷六 二二丁裏4行目) 「ジ」 其ノ児

・(小学 外篇 卷六 二四丁裏5行目) 「ジジヤク」 自若

・(小学 外篇 卷六 二四丁裏5行目) 「ジジヤク」 自若

・(小学 外篇 卷六 二六丁裏7行目) 「ジクタン」 肉袒

・(小学 外篇 卷六 四三丁裏7行目) 「ジウジ」 乳児

・(小学 外篇 卷六 四三丁裏7行目) 「ジウジ」 乳児

・(杜律集解 七言・卷下・12丁表4行目) 「シ」 滋

オ 才列拗長音「キヨウ」を「キユウ」とする

・(小学 外篇 卷六 三八丁裏8行目) 「キウ」 決句

カ 長音の短呼

・(孟子集註 第一冊・序・五丁表3行目) 『厚』の右傍

「コ」 渾厚

一―五 考察

以上、福岡県立図書館の角筆文献について、角筆文字情報をもとに、特徴ある音韻事象をまとめた。

アに示した開合については、開音を合音にしている例がほぼないといいてよい状況であることから、おおよそ開音は合音化せずに、開音として保たれている状況を示している。筆者がこれまで調査してきた中国地方の安芸の角筆文献では、開合は乱れ、全体的に合音化が進んでいる状況が見られた。ただし、安芸の角筆文献には、合音を開音にする例も相当数見られる。これは、開合が乱れていることを示すのか、合音から開音へと歴史的に逆行する現象が一部の語に存したのか定かではない。これに対して、諸岡家文書の角筆文字情報では、開音が開音のままであり、開音を合音にする例は見られない。全体的に角筆文字情報が未だ少ないので確定はできないが、この状況を見る限り、筑前西部地域の近世の状況は、開合が保たれていたと判断できる。

イに示した「ガ行ザ行の才段の直音を才段拗音にする」例は、広島県安芸地方の角筆情報には見られない事象である。現代の九州方言の拗音化については知られているが、ここで見られるのは、ガ行ザ行の才段の例だけで、特に「ゾク」が「ジョク」となる例がほとんどであり、現代語の九州方言の現象と直接に関連付けられるかは不明である。

ウに示した合拗音については、合拗音はすべて合拗音のままであることから、合拗音の直音化は生じていなかったと考えられる。広島県の安芸地方の角筆文字情報では、拗音が直音化し

た例が多くみられる。ただ、安芸地方の角筆文献にも、合拗音を保った文献も存することから、合拗音の直音化の近世後期の状況については、今後、資料をより多く収集したうえで検討が必要である。

エに示した四つ仮名については、本来「ヂ」「ヅ」に当たる用例が見いだせていないので、四つ仮名が乱れていたかどうかについては、不明である。

オに示した例は、オ段拗長音の「キヨウ」をウ段の「キユウ」で読んだ例である。九州方言で、このような例があることは、古くは日葡辞書で示されており、現代の方言でも「今日」を「キユウ」と発音する例が認められる。安芸地方の角筆文字情報でも、オ段拗長音をウ段で読んだ例が散見される。近世後期において、オ段拗長音をウ段で発音することは、九州だけではなく中国地方でも行われていたことを示す。

カに示した例は、「渾厚」とある「厚」を「コウ」ではなく「コ」とだけ発音したことを示す可能性がある。いわゆる長音の短呼の例となる。ただし、一例だけであり、他の例の長音はそのまま長音として読んでおり、また、該当する例は「コウ」の一部だけを書き記したという可能性も排除しきれないので、筑前地方で長音の短呼が広く行われていたかどうかについては断定できない。なお、長音の短音化は、現在の九州方言にも見られる現象である。

二 福岡県立図書館以外の調査で見つかった九州北部地域の角筆文献

二― 長崎歴史文化博物館 福田文庫

長崎歴史文化博物館での角筆文献調査は二〇一九年二月十九日から二月二十三日にかけて行った。目録であらかじめ所蔵文献を調べて、漢籍の四書五経を中心に調査した。漢籍の中でも福田文庫に漢籍類が多いことが分かり、限られた調査期間でもあることから、福田文庫を中心に調べることとした。調査者は柚木靖史のみである。以下、見つかった角筆文献について報告する。

(1) 新正校版 孟子 道春点 一冊 (テ11/98/1)

元禄八(一六九五)年板 袋綴装 縦28・0×横19・

0

(刊記) 元禄八乙亥歲十一月六日

都書林 小森善兵衛 壽梓

〔主な角筆文字情報〕

・(八才8)者(モ)ノ也

(補注) 全頁裏打ち補修がされており、角筆は消えている可能性がある。確認できたのは、一か所のみであるが、もとは、もつ

と多くの角筆の書入れが存した可能性がある。

正打金ヲナス途中二帰ル

(2) 三体詩 (上中下) 三冊 (福田 テ12/23/1)

貞享二(一六八五)年板 袋綴装 縦28・0×横19・

0

(内題) 唐賢七言律詩三体家法

(刊記) 貞享二龍集乙丑仲冬穀日

〔主な角筆文字情報〕

・(巻二 四〇オ7行目) 傾(ケ)一側

(補注) 全頁裏打ち補修がされており、角筆は消えている可能性がある。確認できたのは、一か所のみであるが、もとは、もっと多くの角筆の書入れが存した可能性がある。

(3) 大字改正 古文真宝後集 (乾坤) 二冊 (福田12/2
2/1・2)

弘化二(一八四五)年板 袋綴装 縦25・5×横18・

5 「長崎県立長崎図書館印入購 昭和59 486」印

あり

(内題) 諸儒箋解古文真宝後集

(第一冊 後表紙 墨書) 雪瀧山人

(第一冊 後表紙 別筆墨書) 大正元年十月廿九日

市役所出頭暮昏時而長ハ止。訂

(刊記) 弘化二年乙巳孟春補刻／皇都書肆／富小路通三条上ル
町／榭屋勘兵衛

〔主な角筆文字情報〕

・(巻一 十五オ3) 嫻(上)嫻(上)トシテ

〔「デウ」という読みを類音字「上」で表す。「上」の音は「ジヤウ」なので、ダ行で始まる音をザ行の類音字で表記したことになる。開合も異なる。〕

・(巻一 一〇ウ7) 横(ヲウ)檻(横)の音は「ワウ」で本来開音である。これに対し、「ヲウ」は合音である。

・(巻九 十二オ4) 肥(饒(上))「ゼウ」という読みを類音字「上」で表す。「上」の音は「ジヤウ」なので、合音を開音の類音字で表している。)

・(巻三 十一オ3) 島(嶋(トシヨ))

「島嶋」は、「トウシヨ」と読むが、角筆では「トシヨ」とあり、「トウ」を「ト」と短呼している。また、「嶋」は「シヨ」と連濁している。「島」「嶋」の一体化がより進んだ結果、「トウ」が「ト」となり、さらに連濁を起こしたのではないかと考えられる。

- (4) 近思録 四冊 (福田11/20/1) 「三一五」 (福田11/20/2) 「六至九」 (福田11/20/3) 「十至十四」 (福田11/20/4)

文久四 (一八六四) 年板 朱印「長崎県立長崎図書館 昭和59」あり

〔刊記〕 文久四子歳再鐫

建安 葉采集解 近思録 浪華書肆 松敬堂 松根堂/梓

〔主な角筆文字情報〕

・(巻二 六才4行目) 外誘「ユウ」

・(巻二 十八才7行目) 這裏「リ」

(5) 聖教要理問答 一冊 (中国文献)

〔主な角筆文字情報〕

・(一〇才4) 在天我等父物「・(角)」我等願爾名見聖「・

(角)」爾国

・(一〇才5) 格「・(角)」爾旨行於地如於天焉「・(角)」我等望「・(角)」爾今

その他、角筆文字「・」(句切り点) 多し。

本文に角筆によって「・」が詳細に付される。これは、「・」によって、本文の句切りを示したものである。この角筆の付され方は、中国文献に付された角筆文字情報と同じである。よつ

て、本角筆は、本書を中国から移入した際に、すでに中国において角筆情報が付されていたと考えられる。⁽⁴⁾

二二二 諫早市立図書館

諫早市立図書館での角筆文献調査は二〇二〇年三月十七日に行った。文献目録であらかじめ所蔵文献を調べて、漢籍の四書五経を中心に調査した。調査者は柚木靖史のみである。

以下、見つかった角筆文献について報告する。

(6) □正 書経 (経6 書経) 一冊

江戸時代初期板 青表紙 朱書あり

〔主な角筆文字情報〕

・(巻一 二十六才3) 厥疆畎若作

「畎」と「作」の間に角筆の横線あり。句切符号か。朱書の横線もあり。朱書と角筆の前後関係は不明。」

・(巻一 二十六才8) 肆王惟

「肆」と「王」の間に角筆の横線あり。句切符号か。」

(7) 論語集解 二冊 (経52)

序(巻五 (二冊目) / 巻六(巻十 (二冊目)

享保十七 (一七三二) 年板 朱印「諫早文庫」あり 版心

記「千鍾堂藏板」

〔刊記〕 享保十七年壬子二月穀旦

式江書肆 千鍾堂 須原茂兵衛寿梓

〔主な角筆文字情報〕

・(巻一 三ウ3) 如シト北辰ノ居テ其ノ所二

「如」の右傍に「三」、「居」の右傍に「二」、「所」の右傍に

「二」と角筆あり。返り点か。

(8) 論語 四冊(経53)

巻一〜巻二(一冊目)／巻三〜巻四(二冊目)／巻五〜巻

六(三冊目)／巻七〜巻八(四冊目)

江戸時代後期板「諫早文庫」朱印あり

(表紙・墨書) 論語

(内題) 論語集註

〔主な角筆文字情報〕

・(巻一 二オ2) 強楷

「強」の右傍に角筆で「キヤウ」とあり。「強」はもともと開

音なので、角筆の「キヤウ」と合致する。

・(巻三 四十六オ7) 煥タルカナ

「煥」の右傍に角筆で「クハン」とあり。「煥」の音は、合拗

音の「クワン」なので、角筆と合致する。

・(巻三 八オ5) 貨殖ス

「貨殖」の右傍に角筆で「クワシヨク」とあり。「貨殖」の読

み。「貨」の音は、合拗音の「クワ」なので、角筆と合致する。

この他にも角筆文字情報あり。

(9) 論語 朱熹集註 一冊(経55)

(巻八〜巻十)

江戸時代後期板

〔主な角筆文字情報〕

(表表紙見返し・墨書) 諫早 本口氏

・及テ「及」の右下に角筆で「ン」とある。ここでは「オヨビ
テ」が撥音便になって「オヨンデ」と読まれたと思われる。

二一三 長崎大学付属図書館医学部分館

長崎大学付属図書館医学部分館での角筆文献調査は二〇一九
年三月十日から三月十三日にかけて行った。当館所蔵の文献目
録を調べ、蔵書の中で特に漢籍の多い佐藤方朔文庫を調査対象
とした。調査者は柚木靖史のみである。以下、見つかった角筆
文献について報告する。

(10) 礼記 二冊(方朔文庫)

(二冊目) 題簽なし(二冊目) 改□ 礼記 卷之三

江戸時代初期板 縦25・8×横19・5 青表紙

(版心記) 新版

(二冊目・卷末・墨書) 藪廣岳

〔主な角筆文字情報〕

(二冊・五三才7) 班(反)制(類音字表記)

(二冊・七八ウ1・上欄)「ブン」 盆ヲ ブンの朱書もあり(母音の交替例か)

その他、角筆文字情報あり。

(11) 孟子 (上中下) 三冊 (方朔文庫 141 1~3)

江戸時代後期板 茶色表紙 縦24・2×横19・

4 「明倫館」朱印あり (版心記) 明倫館

(第一冊・題簽) なし

(第二冊、第三冊・題簽) 改訂音訓 孟子

〔主な角筆文字情報〕

・(中 一八才7) 餉(正)(類音字表記)

・(中 二七才2) 兵甲(コ)(長音の短呼の例か)

(12) 孟子 三冊

(序 卷一 卷二 卷三 卷四) 方朔文庫 171・172

安政五(一八五八) 年板 袋綴装 茶表紙 縦25・

0×横18・0 題簽(二冊目剥落 二冊目破損)

(版心記) 後藤点

(刊記) 寛政四年壬子 初夏御免上梓/寛政六年甲寅孟春 発

兌/文政三年庚辰春 再刻/天保六年乙未春 三刻/天

保十一年庚子春 四刻/嘉永三年庚戌 五刻

安政五年戊午春正月 六刻

平安書肆 北村四郎兵衛/東都書肆 須原屋茂兵衛

須原屋源助/浪華書肆 炭屋五郎兵衛

(第一冊・表紙見返・墨書 一冊目) 長陽厚狭郡 樺原泉 布施
方朔

(表紙見返・墨書 二冊目) 樺原 布施 午後

(後表紙見返・墨書) 長陽厚狭郡 布施方朔

〔主な角筆文字情報〕

上欄に角筆の線あり(三冊目 三八丁表4行目) 符号のみで角筆文字情報なし

(13) 易経 一冊(上巻のみ) 方朔文庫 123F 214

2353

江戸時代後期板 縦25・5×横18・5 題箋なし 墨にて直に「易経 乾」とあり

(版心記) 改正音訓

(第一冊・後表紙見返・朱書) 長陽樺原布施氏

(内題) 後藤点五経序

文化九年壬申九月 江都 佐藤坦 撰

〔主な角筆文字情報〕

・(七一丁裏) 咎(「トカ」)

(14) 新刻改正 詩経 上 道春点 一冊 方朔文庫 12

5・2142356

江戸時代後期板 青表紙 袋綴装 縦25・0×横1

8・5

(版心記) 北村新版

(卷末・墨書) 幾村新吉 藪氏

(表表紙・見返し・墨書) 文化卯年 疆梧単閏秋八月／藪原卿士

勤識

(尾題) 詩経 卷上 終

〔主な角筆文字情報〕

・(六六丁裏) 斧(「ヲ」)

(15) 新刻校正 易経 道春点 乾 一冊(易の上のみ) 方

朔129・2142363

江戸時代後期板 青表紙 縦25・5×横18・8 後

表紙なし

(版心記) 北村新版

〔主な角筆文字情報〕

・(十三丁表6行目) 三ノ駆(「ク」)ス

(16) 中庸 一冊 方朔170・2142523

江戸時代後期板 青表紙 縦27・5×横19・0

(表紙見返し・墨書) 二月の廿一日からならをた(習うた)

(内題) 中庸章句序

(後表紙見返し・墨書) 本主 上田氏 上田蔵 ウエタ

〔主な角筆文字情報〕

・(二丁裏5行目) 著(「コトニ」)

・(二四丁裏8行目) 郊(「コウ」)社(開音を合音にした例)

(17) 改訂音訓 論語 下 一冊 方朔文庫 135・21

42401

江戸時代後期板 黒表紙 縦24・0×横16・7

(版心記) 明倫館蔵

(内題) 論語横下終

〔主な角筆文字情報〕

・(下) 三丁裏3行目 愚(「ク」)参(「シン」)

・(下) 六丁裏6行目 復(「カエ」)レハ

・(下) 四八丁裏5行目 丘陵(「ハカ」)ナリ

三 福岡県立図書館における角筆文献の調査方法及び調査作業の考察

第三章では福岡県立図書館にて角筆調査を柚木と近藤での二人で協力しながら進めた調査を参考に、角筆文献調査の効率化を目指した考察を行う。

三―一 角筆文献の調査とは

本稿においては福岡県立図書館を中心とした角筆文献の調査で見つかった資料を元にその考察を進めている。角筆で書かれた文字や記号等を探し出すには当然であるが文献を一頁ずつしっかりと見ていく必要がある。これは視認による目による認識が基本となる。しかし角筆で記された文字や記号は筆などで記された墨字とは違い、角筆という木や竹などの先端が尖った筆記具で「書く」というよりも、紙に線をつけて凹ませる「刻む」ことよって記された文字や記号であるため目で見てすぐには認識しづらいものである。⁽⁶⁾この点はこれまでの角筆文献の研究・調査をやや阻むものであり、研究しづらいだけでなく、角筆文献の存在自体を知ってもらうことができない状態になっている。この項では、角筆文献の調査を何とか円滑に進めていけるように考えた調査方法について、福岡県立図書館での調査

を元に考察を行う。

三―二 角筆文献調査の試行

角筆文献の調査のための基本的な準備物としては、たとう紙、留守番紙、筆記用具、記録用紙があげられる。角筆文献は江戸時代後期などの古い文献を扱うことが多いため資料を保存する観点からたとう紙を机上に敷くなどの注意をしている。また筆記用具は鉛筆を用いているが、シャープペンシルなどの尖ったもので資料を傷つけない点を考えてのことである。その他、和装資料の大きさなどを定規で測る、写真撮影が可能な場合は角筆で記された文字の刻みの輪郭が明確にわかるように光の角度には注意をはらうなどの点があげられる。こうした調査法については以前の共著論文『金光図書館蔵角筆文献の再調査』にてまとめているが、⁽⁷⁾本稿では福岡県立図書館の調査時において特に注意した点を次にあげ、調査方法についてより考察を進めたい。

三―三 角筆文字と光との関わり（福岡県立図書館での調査から）

福岡県立図書館の角筆文献では江戸時代中期から後期、明治期の資料に角筆の書入れが見つかった。例えば、前述の解説できた角筆文字の例（6）小学 外篇などでは多くの文字が確認で

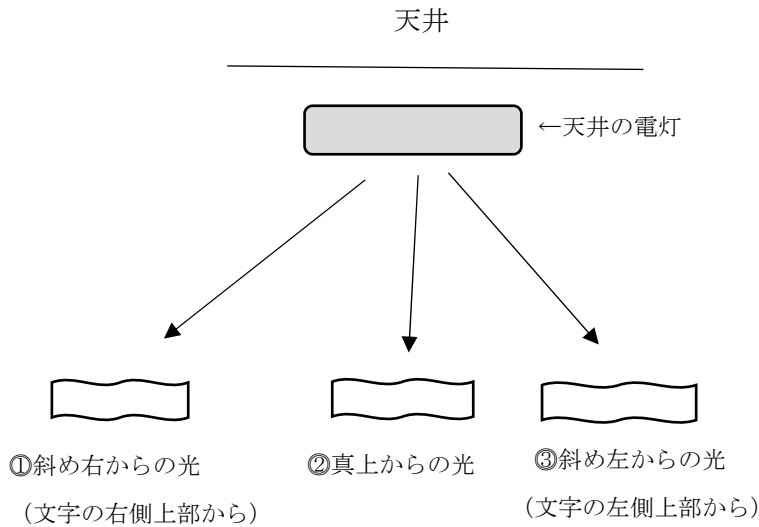


図1 一般的な天井の電灯での調査

きたが、その検討のために写真撮影にて記録を残すことで、資料調査後に時間をかけて角筆文字の比較や考察を行えるよう第二次調査の際は気をつけた。調査方法の試行でも述べたように光の角度で角筆で記された(刻まれた)文字の明確さに違いが

生じる。そのためまずは文字の確認を視認することで再度進めた。このときに図書館内の一般的に天井部分にある電灯での光源で角度をいろいろと変えて文字を確認してみたが、あまりよくわからない場合が多く、文字の判読も非常に時間がかかる状態であった。そのため確認のための①電灯を斜め右(文字の右側上部から) ②真上から ③斜め左(文字の左側上部から)という三か所で位置を変えつつ目で見た変化を確認し、写真撮影ができる(写真に角筆文字が写るかどうか)を試してみた(図1参照)。しかし、残念ながら角度を変えてもほとんど違いがなく、見えづらい状態の角筆文字の判読に時間がかかる状態であり、写真を写してもわからなかった。

三―四 人口光と自然光の違い

今回は一般的な電灯の下、角筆文字を明確に見るために光との関わりを大まかな角度の違いから確認してみた。角筆文字が見えないわけではないが、見えづらい状態であり、写真に写してもわからない状態であった。そのため図書館の方に窓際での自然光の下で資料の確認をお願いして許可をいただいた後、今度は窓際で資料の確認を行った。すると電灯の光の下に比べて、自然光のほうがかなり見えやすく角筆文字も見つけやすかった。これまでも自然光の太陽光の下で見たときが最も明確に見えやすいことが多く、太陽光の波長が角筆文字の凹み(刻み)の部

分を明確に映し出せる状態を作ることが予想できた。今回は自然光でのほうが角筆文字の調査には効率的であることがわかり、写真撮影についても自然光の下で行った。再調査で写真撮影を行うことができたことで、これまで記録でしか残せなかった角筆の調査がより具体的な形を残す形で角筆文献の調査に結び付けられることがわかった。しかし自然光には課題も多く、撮影時や文字の確認中に太陽光が雲などの動きで遮られた場合などに急に光度が落ちてしまい、見えづらい状態が発生した。また写真による記録では撮影時の光度の違いで背景がやや白いものや、反対に暗いもの、などが発生してしまい、記録として残すには問題があることもわかってきた。今回の調査では角筆の書き入れを発見、解説につなげていく目的があり、そのために写真撮影の記録も役立てていけるようにしたが、撮影後の確認時に、撮影の明確さにむらが出ないように注意する必要があることに気づいた。

今後は写真の記録を整理し、比較や検討に役立てられるようデータベース化なども考えていきたい。しかしまだまだ撮影段階での問題も多いことが調査によりわかってきた。こうした点は今後の検討課題としていきたい。

おわりに

本論文は、二〇一九年から二〇二〇年に行われた角筆文献調査の内容を報告し、福岡県立図書館の諸岡文書を中心に、角筆文字情報をもとに近世の筑前地方の音韻事象について検討した。さらに、図書館情報学の立場から、角筆調査や角筆研究の問題点について考察した。

調査の結果、ガ行ザ行の才段直音の拗音化といった、現在の九州方言に見られる事象を角筆文献において確認した。今後は、さらに広島県安芸地域と九州北部地域の角筆調査を行い、両地域の言語的特徴について明らかにしたい。

- (1) 小林芳規『角筆文献研究導論』(汲古書院 二〇〇四年—二〇〇五年)ほか。
- (2) 『福岡県文化会館所蔵 福岡県近世文書目録』(第1集) (昭和45年2月 初刷 平成元年1月31日 第2刷 編集発行 福岡県地方史連絡協議会)
- (3) 福田文庫は、「長崎県の郷土史料」(昭和63年3月発行 編集 長崎県の郷土史料編纂委員会207頁) によれば、「長崎県の郷土研究家 福田忠昭(1879~1930) 収集の刊本、写本、文書、記録類である(中略) 部数は、刊本、写本、文書類1003点、洋書5点、絵図地図類103点、器具4点である。昭和59年福田てい子から購入。」とある。
- (4) 柚木靖史「中国(北京) 明・清時代の角筆文献—中国における角

筆文献大量発見の可能性を探る―(二)の坂川姫山国語国文論集―
一九九七年八月)

(5) 佐藤方朔(1854~1886)は、山口県出身で、医学会で活躍し、三十一歳で死去した。「佐藤方朔文庫」は、ご子孫から寄贈

された資料で、長崎大学附属図書館医学部分館に収められている。本資料の角筆文字情報が、佐藤方朔に関わるかどうかは不明である。

(6) 図書館総合展2022ポスターセッション 図書館に関わる私たちが
(近藤友子、石田泰子、柚木靖史)「角筆の世界」そこにあるのに見えにくい文字」

(7) 柚木靖史、近藤友子、石田泰子著「金光図書館蔵角筆文献の再調査―角筆文献の再整理と目録や調査法に関する今後の課題―」(『広島女学院大学論集』71号 二〇二四年)

【付記】

本論文は、柚木靖史(広島女学院大学教授)と近藤友子(ノートルダム清心女子大学准教授)の共同執筆である。はじめに、第一章、第二章、おわりには柚木が執筆し、第三章を近藤が執筆した。

Investigation of the Kakuhitsu Manuscripts in the Northern Kyushu Region
—Focusing on the Morooka Documents from the Fukuoka Prefectural Library—

Yasushi YUNOKI and Tomoko KONDO

Abstract

This paper presents findings from an investigation of the Kakuhitsu manuscripts conducted between 2019 and 2020. The research confirmed phonological phenomena that are also observed in present-day Kyushu dialects. This study specifically examines the phonological features of the early modern Chikuzen region, with a focus on the Morooka documents housed at the Fukuoka Prefectural Library. For instance, one of the identified phenomena includes the transition from single-kana sounds to contracted sounds.